

智洞編 『龍谷学鬘内典現存目録』の研究

万波寿子

A Study of the Catalogue of *Ryūkoku Gakko Naiten Genzon Mokuroku* 龍谷学龔内典現存目録, edited by Chidō 智洞

Mannami Hisako

In the early modern period of Japan, the Gakurin 学林, school of Nishi Honganji 西本願寺, imported the Tripitaka of Jiaxing 嘉興藏, a printed version of the Tripitaka convenient for research use, from China as early as 1674 (Enpo Era 2 延宝二). In the following years, the library of the Gakurin improved remarkably, following the progress of education and research with printed books.

In the 3rd year of the Temmei Era 天明三年 (1775), Chidō (智洞 : 1736-1805) compiled a catalog of the school's collection, *Ryūkoku Gakko Naitenn Genzon Mokuroku* 龍谷学龔内典現存目録 : Current Catalogue of the Ryūgoku School Collection). It was a huge catalog that describes 4, 699 copies of the Buddhist scriptures (including the Tripitaka of Jiaxing), 4, 577 canons and 122 apocryphal texts.

However, when I checked various books, I found that the *Ryūkoku Gakko Naitenn Genzon Mokuroku*, which is in the Gakurin's collection, was not copied in the third year of the Tenmei Era but a little later. There were prototypes before that, and even after it was completed, there were repeated additions and revisions, so we can say that it was an unfinished work.

The catalog is unique in a few points. First, Chidō changed the order of the scriptures in the Tripitaka of Jiaxing in a very different way from the original, with the other books which belonged to the Gakurin library. Secondly, the titles in the Tripitaka of Jiaxing are mixed with the other books in the collection of the Gakurin so that the rearrangement reflects research results of contemporary Japanese Buddhist studies. It is not a mere catalog of the library but a high research achievement made possible by Chidō's academic ability and insight.

Genchi 玄智 (1734-1794), who cooperated in this work, had once envisioned a new compilation of the Tripitaka and proposed how to make its catalog. Although it never came to fruition, Chidō's *Ryūkoku Gakko Naitenn Genzon Mokuroku* was very close to Genchi's idea.

We should not forget that in the latter half of the early modern era in Japan, academic monks such as Genchi and Chidō had so broad a perspective to think about compiling and editing the Tripitaka in a new way.

智洞編 『龍谷学龔内典現存目録』の研究

万波 寿子

はじめに

日本近世期、仏教の世界には出版文化によって革命が起こった。その影響は、近世から現代を通じて最大の仏教教団のひとつである西本願寺教団も例外ではなかった。寛永十六年（一六三九）に設立された西本願寺檀林である学林は、早くから版本による教育研究を開始している。版本による教育は中世までの秘伝による研究を根本から変え、近世仏教学という独特の仏教学として大きく発展させた。

本稿では、このような版本による近世仏教学が到達したひとつの成果として、江戸後期に編纂された『龍谷学龔内典現存目録』五巻を採り上げる。同目録は、天明年間に編纂され、学林（西本願寺檀林）蔵書の全容を明らかにしたものとされる。しかし、内容がよく知られた嘉興蔵大蔵経と版本仏書が主体であり、かつ翻刻されたのが真宗関係書籍の箇所のみであるためか、先行研究も少ない。

しかし、筆者はこの目録が単なる一檀林の蔵書目録の域を越えて、近世仏

教学の到達した境地のひとつである可能性を問いたいと思う。近世の学僧たちは、あふれる版本で学ぶことが前提であり、かつ日本には多くの仏書が残され、時に中国や朝鮮半島のものよりも多種多様な仏書を手にできることに自覚的であった。そのような中で彼らの研鑽が、この『龍谷学龔内典現存目録』に込められていると思う。

まずは、同目録に取りこまれていた嘉興蔵の学林への入蔵を述べ、同書の編纂過程、概要や後世への影響、さらに当時どう位置づけられていたかを示したい。

一 版本を基盤とする学問へ——西本願寺学林依用の嘉興蔵

学林蔵書嘉興蔵の入蔵

西本願寺学林における版本教学への転換の象徴としては貞享三年（一六八六）の寂如宗主（一六五一—一七二五）による教行信証伝授が挙げられよう。

三浦真証氏によって明らかになった伝授は驚くべきものであった。^② 浄土真宗根本聖典である『教行信証』の伝授を、親鸞独自の可能性のある読み方を排

除し、あまつさえ写本でなく町版（民間の本屋の出版した本。坊刻本ともいう）によって行ったのである。この伝授で宗主を補佐したのは時の能化知空（一六三四～一七二八）であった。能化は学林最高職である。学林を預かる知空と宗主である寂如によって伝統ある聖教伝授は否定され、西本願寺教団では途絶えることになった。

すでに貞享三年は出版文化が定着し、盛んに町版（民間で出された版本。坊刻本ともいう）仏書が出版されていた。大藏経でさえも、勉強に至便な冊子体の黄檗版大藏経が二〇〇貫で購入出来る時代であった。仏教学全体を見据え、西本願寺教学が安定して発展できるよう、中世における伝授的性格の教学との決別は避けられなかったのだ。

そして今ひとつ、学林の版本教学転換の象徴と言えるのが、冊子型で版本の大藏経である明の嘉興蔵大藏経の入蔵である。学林は江戸時代の早い時期に入蔵を果たしている。現在、龍谷大学大宮図書館の写字台文庫に所蔵される嘉興蔵大藏経（請求記号 Z33.13-W.290）がそれである。各冊冒頭の一丁に「龍谷学覺大蔵書」の蔵書印が押されているが、この印は学林蔵書の証だ（図1）。

ただし、この学林の嘉興蔵の入蔵時期に関しては、延宝二年説と享保十四年説があるので、まず検証したい。前者は知空や寂如存命中で、後者は没後である。

まず延宝二年説の方は、延宝二年（一六七四）、西本願寺家臣の筆録『山中覚悟記』の同年十月二十九日の条に以下のようにあることに拠る。

十・廿九、於長崎一切経召レ之

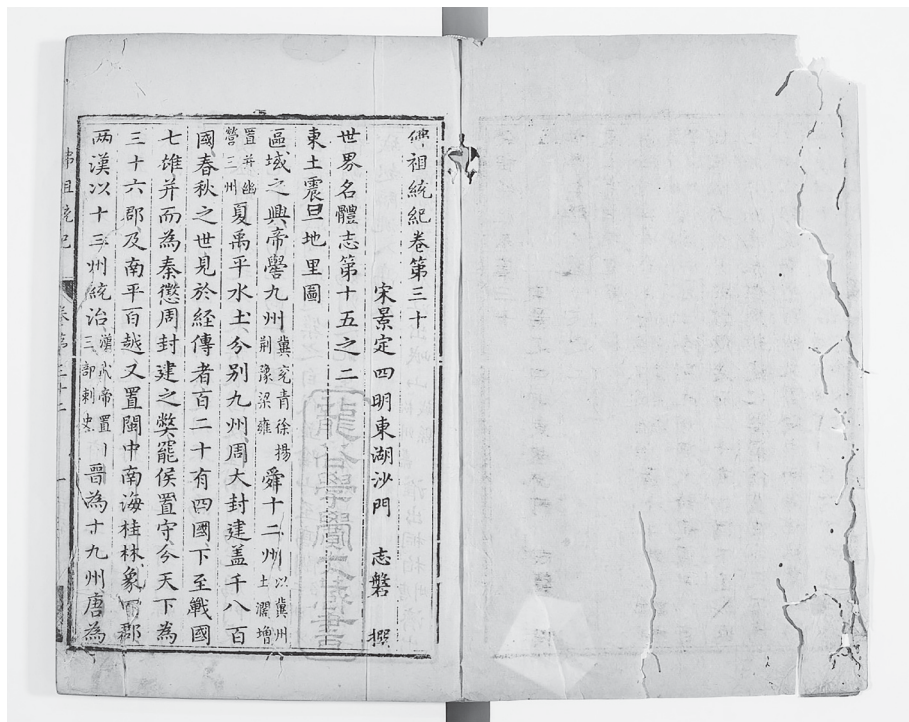


図1 嘉興蔵『佛祖統記』三十卷冒頭（蔵書印「龍谷学覺大蔵書」が見える。学林（西本願寺檀林）蔵書の証である。）

若き宗主寂如が長崎から一切経（大藏経）を請来したとの記事である。「一切経」とのみあるが、明代に刊行された大藏経のうち南北二蔵は勅版だったので日本には持ち込めなかった。嘉興蔵だけが舶載できたので、この時購入

した大蔵経は嘉興蔵と考えてよい。西本願寺には幕府より送られた天海版大蔵経が存在するが、天海版を納めるための経蔵を建てたのが延宝五年（二六七七）である。それよりも二年早い。

もうひとつ、享保十四年説は西本願寺の碩学玄智景耀（一七三四〜九四）の著書『大谷本願寺通記』巻三、享保十四年（二七二九）の項に以下のようにあることによる。

十二月二十五日、蔵経至自大坂（案是海舶来ノ者。今在別庫）

（「（）」は割注を、「」はその折り返しを示す。以下同じ。）

すなわち、住如の治山中である享保十四年十二月、大坂から舶来のもと推定される大蔵経が入蔵したとある。「今在別庫」というが、「別庫」が何処を指すかは不明である。

最新の報告である中田篤郎氏の論考^③では、享保十四年に入蔵したとの説をとっている。それは、同嘉興蔵の『大般若経』六〇〇巻の調査で発見された、『大般若経』の第十四冊六六巻の第一丁と二丁の版心に、「庚申契禪契穎ノ重刊」との記述があることによる。「庚申」の年に重刻された『大般若経』であると思われるが、これは西暦で言えば明の万曆四十八年（一六二〇）または清の康熙十九年（一六八〇）だが、嘉興蔵正蔵が完成したのが万曆四十八年頃であり、この年に重刊はあり得ないことから、この「庚申」は清代の康熙十九年ということになる。したがって、延宝二年（二六七四）年に同書を購入することは無理であるため、享保十四年に嘉興蔵が入蔵したとする。

しかしながら筆者は、『大般若経』にはそうした可能性を認めた上で、延

宝二年説を採りたい。根拠は、同嘉興蔵に知空の書き込みがあることである。『仏祖統記』五十四巻のうち、第三十七巻（一四四〇冊目）に、「宝永八辛卯年二月加朱点記ノ寓光隆寺仏子臥雲閣知空（七十八齡ノ書之）」とある（図2）。宝永八年（二七一二）に当時七十八歳の光隆寺知空が朱点を書き込んだ

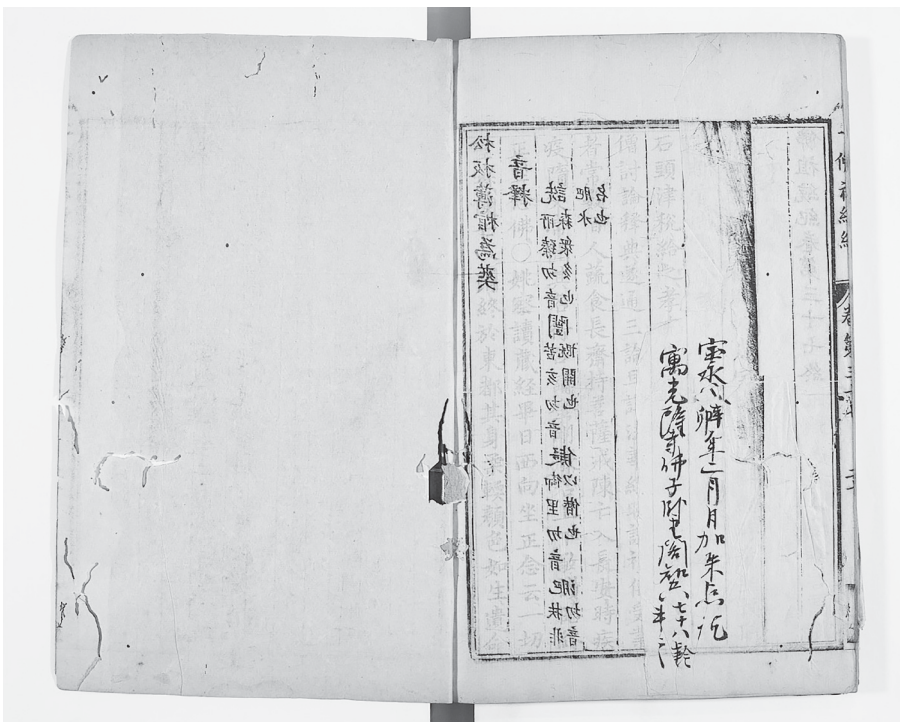


図2 嘉興蔵の知空書き込み（七十八歳の知空による書き込み。知空存命中に嘉興蔵は学林に来ていた。）

という。

知空の朱点と思しき書き込みは『仏祖統記』全五十四巻中、第十五巻からわずかに見え始め最終巻まで続く。宝永年間にこの嘉興蔵『仏祖統記』は学林にあり、能化が朱点を加えているのである。よって、この箇所から言うならば、延宝二年説が正しいと言うことになる。

さらに、同嘉興蔵は又続蔵に『指月録』三十巻を含んでいる。この經典は、延宝二年から三年後の康熙十六年（一六七七）、清国皇帝の命で嘉興蔵より外されている。つまり、延宝二年から三年後以降に発行された嘉興蔵には基本的には入蔵していないのである⁴。

『大般若経』が重刊されたものである理由はわからない。これは『指月録』が入っていることと矛盾する。筆者は当該嘉興蔵の全てを閲覧できたわけではないが、閲覧できた百数十冊の嘉興蔵に比して『大般若経』は表紙が新しくなった。従って、『大般若経』だけ差し替えられた可能性も一応は考えられる。後考を俟ちたい。

延宝二年以降に重刊された『大般若経』があることについては不明ながら、知空の書き込みと『指月録』があることから、寂如治山の時代、そして知空が能化にあった時代に嘉興蔵は学林に入っていたと考えられる。

嘉興蔵入蔵の意義

この嘉興蔵入蔵と前後して、西本願寺は天海版大蔵経を入手している。しかし、学問利用するには天海版はあまりに不向きであった。活字版であったために、発行できる部数は非常に少なく誤植が多い。かつ装訂も蛇腹折りの折本装であったから、取り扱いが難しく、丁数を示せないで引用しにくい。徳川幕府の大蔵経ということを利用して憚られたと言うことを抜きにしても、

教育や研究には不便であった。

一方の嘉興蔵大蔵経は誤植が少なく耐久性に富む整版印刷で、冊子型であった。通し番号として使える千字文が各冊に配されており、版面も半丁一〇行、一行二〇文字に統一され閲覧や引用に至便だった。日本でも嘉興蔵の有効性はよく知られていたようで、嘉興蔵の部分的な覆刻本が町版（民間の出版物。坊刻本とも）として多く出されていた。また、延宝二年より七年後の元和元年（一六八二）、嘉興蔵の覆刻として黄檗版大蔵経（檗蔵）が開版され、非常に普及して日本近世仏教学の基礎的テキストとなった。延宝二年当時、嘉興蔵は寂如や知空にとつて学問利用に至便な版本大蔵経として認識されていたはずである。

寂如、知空時代の版本教学への転換の象徴として、町版による本典伝授に加えこの嘉興蔵の入蔵を挙げたいと思う。

二 『龍谷学叢内典現存目録』編纂まで

林蔵の管理の変遷

寛永年間の学林創立期以来、学林の文庫は現在で言う大学図書館のような機能も整備されていった。現在、龍谷大学大宮図書館の仏書といえ、質量ともに世界有数のコレクションとして知られる。その中心が学林の蔵書であることは疑いない。

学林の蔵書の大部分を引き継いだ龍谷大学大宮図書館所蔵の『俱舍論釈頌疏義鈔』第六巻末尾には、「此書六巻者全以来集之所化入銀七分買求之納学寮之什物也 慶安四年十月一日」と書かれている。慶安四年（一六五二）は

知空が能化職に就く七年前のことだが、これが学林における、寄付などではなく学林内部の人が書籍を購入して入蔵させた最初の記録である⁵⁾。

記録上からも、学林の文庫が充実していくのが確認できる。『学林万檢雜牘』、『学林万檢』や『嚴護録』は、学林の日常の諸事項の記録である。なお、本稿では以下、『学林万檢』、『学林万檢雜牘』、『嚴護録』の引用については、龍谷大学三百年史編集委員会編『龍谷大学三百年史』史料編第一巻、第二巻に拠った⁶⁾。このうち『学林万檢雜牘』によれば、図書の閲覧については、延享四年（一七四七）の定には「一、夏余閱蔵停止之事」とあり、図書の閲覧は夏期開講中に限っていた。しかし、『嚴護録』巻一の文政四年（一八二二）四月の「知蔵室 定」には「開蔵、例月一・六与相定候事」とあり、毎月六日ほどの閲覧日が設定されていたようだ。また、「一蔵鑑及目錄者、役所江罷出取扱致すへし、知蔵寮江持返り候儀、決而不相成候事」など閲覧に際しての項目が多くあり、活発な蔵書利用が窺われる。なお、知蔵とは蔵書を管理する役職で、古くは蔵司といった。

学林蔵書目録編纂への機運

書庫が充実し図書館としての機能が整ってくれば、蔵書の整理が必要になる。蔵書の分類方法を決め、それに従って蔵書を配置する。目録を編纂し、不足している本を加え、不要な本は除いていかなければならない。

学林蔵書に統一的な目録ができたのは、天明三年（一七八三）十一月のことだった。『龍谷学贖内典現存目録』である。「内典」とあるが、外典目録をも含んでいる。多くの仏書とともに、嘉興蔵大蔵経の正蔵から続蔵、又続蔵までを含む、巨大な目録となっており、現在、西本願寺檀林最初の完備した蔵書目録と見做されている。ここでは、まずこの目録の編纂への経緯とその

特徴、後世への影響を考えたい。

当時、目録編纂への気運は高まっていた。折しも天明二年（一七八二）、経典の解題集で、翻訳の単復情報も入っている天台僧智旭編『閲蔵知津』四十卷（順治十一年（一六五四）成立）が単独刊行された。天台僧慈舟によって二十冊に整えられて開版されたものである。同書は解題集という機能の他に、天台五時教判（中国天台の智顛による、釈迦が五十年間に説いた教法を五つに分類したもの。華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時の五つ。『法華経』を最も重要視する）に基づき、新しい分類方法がなされていた。もともと嘉興蔵に入っていたが、この時期には関心が高まったものと思われる。

また、この一年前には西本願寺の学僧大瀛（一七五九―一八〇四年）が『閲蔵知津』の抜萃本一卷を、師である慧雲に乞うて刊行していた。この大瀛は後に学林の正統教学を批判し、近世最大の宗教論争三業惑乱のきっかけをつくった学僧として知られる。当時の教団内でも同書には関心が寄せられていた。

加えて、西本願寺の学校は宝永年間に苛烈なまでの聖教の真偽判断を行い、明和二年（一七六五）に真宗聖教のうち仮名聖教を集めた叢書『真宗法要』三十一巻を刊行している。これ以降、『教行信証』等漢文聖教も蔵版化を進めていた時期で、西本願寺教団では、聖教版本を本山が管理下に置くことを進めていた頃であった。さらに天明四年には本山の命を受けて、先述の玄智が西本願寺教団初めての宗史である『大谷本願寺通記』の編纂に着手している。総じて、本山が学問機関として体裁を整え、権威が中央へ集中された時代だった。

学林蔵書を充実させ、かつそれらを仕分け体系付ける機運はできていたと

言えるだろう。

編纂事業

具体的な計画が書かれた記録はないが、『学林万檢雜牘』の天明三年（一七八三）七月の条に、「蔵外之統書円満之取組」、十一月三日には「蔵書具備之用事」として編纂事業に関連した記事がある。以下に、七月の方を掲げる。

一、七月廿六日智洞首座及実道子入林、蔵外之統書円満を取組、依之両士林中飯料は常住より出す、依_レ右先達而御能主え申上、猶又書林之義江南復古候事尤候得共、老軒に而は不自由に付、両家へ可_二申付_一旨、御能主侍者より申来候故、自今林門之書林江南四郎右衛門、額田庄三郎両家江申付、今般蔵外統書円満之用も、右両家へ申付候（「ぬけ」右之趣、九月十一日出_レ便に御侍者迄申遣事

七月二十六日に僧侶の智洞（元文元年〔一七三六〕文化二年〔一八〇五〕）が学林に入り、蔵書整理に取り掛かっている。この智洞は寛政元年（一七八九）に第六代能化功存の没後をうけて第七代能化職を継いだ高僧で、号は桃華坊、京都の浄教寺の僧侶である。一般には先に述べた宗教論争である三業惑乱の主要人物として知られる。

さて、この時智洞が取り掛かったのは「蔵外之統書」、すなわち外典に関すると思われる。これより少し前から内典についてはすでに整理を行っており、集書や目録作成がある程度目途が付いていたのだろう。

そして、学林側は補佐を行う書肆として河南四郎右衛門を復帰させたが、それに加えて額田庄三郎を加えることを宗主の侍者が提案し、その通りにな

っている。この本屋の補佐は重要である。彼らは本を探すことに長けているからだ。江戸時代の本屋は現在のそれとは異なり、本の総合業者である。新書の出版はいわば表の顔で、実際に安定的な利益を生むのは古書業関連の方であり、顧客のニーズに因應するため、本（その大部分は古書で、稀覯本の探索も含まれる）を探すことは業務の内であった。

こうして智洞は、より多くの書籍の収集と整理に取り掛かった。天明三年七月の『学林万檢雜牘』には、智洞等の食事などは常住から出すとしているが、この「常住」は経常費予算を示しているらしい。学林の事業として、集書が進められたことがわかる。

『学林万檢雜牘』によれば、これより前の明和元年（二七六四）から入蔵書が急増している。おそらくこの頃から学林では蔵書の充実、目録化の機運があったのだろう。入蔵した学林蔵書は当初は内典ばかりだったが、安永七年（二七七八）以降は類書、諸子百家や字書の漢籍を含め、外典の収集にも着手している。右の記事の四ヶ月後、明和元年からおよそ二〇年後、天明三年十月初めに、智洞によって『龍谷学叢内典現存目録』五巻と「外典現存目録」一巻の編纂が完了した。

なお、目録完成以後も集書の努力は続けられた。例えば天明六年、『論注翼解』知空書入本を「学林ニテハ宝物ナルユヘニ」光隆寺から寛政元年に購入している。また『浄影涅槃義記』十二巻を稀覯本として東寺観智院宝庫から借りて書写している。一般書だけでなく、稀覯本や学林関係者の手沢本の収集も積極的だった。^⑧

三 『龍谷学覺内典現存目録』とその影響

『龍谷学覺内典現存目録』について

さて、ここからは智洞編『龍谷学覺大蔵内典現存目録』五巻および「外典現存目録」一卷(図3)について見ていきたい。諸本はいくつかあるが、唯一学林の蔵書を示す「龍谷学覺大蔵書」印が押されているのが、龍谷大学写字台文庫に保存されている五冊本である(請求記号000.163/5)。写本、大本五冊(ただし、本文は第四冊まで)。黄朽葉色無文様の表紙に題箋が貼られ、「龍谷学覺」大蔵内典現存目録」と題号が書き込まれている(「龍谷学覺」は角書)。内題は「龍谷学覺内典現存目録」。収蔵された書目は内典四五七部、外典部一二二部。総数四六九九部という巨大な目録である。

体裁はおそらく嘉興蔵大蔵経を意識しており、半丁一〇行一行二〇文字。版心の下に「龍谷学覺大蔵」とある黒の野紙が使用されている。版下風に整えられた文字で整然と書かれており、出版する意向があつたと思われ、長く学林蔵書の規範となるものとして作成されたことを窺わせる。天明三年の年記を持つ深誓の序、続いて智洞の凡例があり、全体の目次、本文と続く。跋文はない。ただし、この目録あるいはそれに近い目録の写本には跋文があるものがある。大痴という学僧による跋文で、編纂作業にはこの人も加わっていたらしい。

第一冊に第一巻から第二巻が収録されており、主に嘉興蔵を独特の配置で収録。第二冊は第三巻となっており、日本の町版で出された中国仏書書目を中心である。ただし、写本や嘉興蔵の書目も頻出する。第三冊は第四巻と五

巻で、第二冊同様坊刻本が中心だが、こちらは日本の著述の書目が収録されている。第四冊目は第五巻と「外典現存目録」が収録されている。

最後の第五冊は特殊で、表紙に続き冒頭に抜き書き風の原稿一四丁が合綴されており、以下は白紙の野紙である。この原稿には問題として「龍谷学覺内典写本現存目録」とあり、また末尾に「享和元年龍舎辛酉秋七月上三識之后越 僧朗」とあつて、享和元年(一八〇一)に越後正念寺の住職で碩学の誉れ高い勸学(当時の学林における最高職)だった僧朗の稿とわかる。おそらく学林蔵書のうち、享和元年に僧朗が内典写本を抽出したものと推定される。例えば同日録には能化法霖の著述などが多く収録されているが、これらは版本化されなかったものが多い。また、珍海の『俱舍論明眼鈔』も上がっているが、別筆で「天保十年五月/新寿干梓」と書き込まれており、実際同書は天保十年(一八三九)に開版されている。ここからも写本目録だったことが窺われる。

成立過程

実は、同書は完成された目録ではない。修正を繰り返した痕跡がそのまま残っている。一度書いた行の上に紙を貼って抹消したために一行抜けてしまった箇所、胡粉で抹消したために文字が明瞭でなくなつてしまった箇所などが非常に多い。料紙の一部を切り取って別の料紙を継いでいる丁もある。明かに版下風の原稿のため出版するつもりがあつたのだろうが、このままでは版下としては使えないものである。序文と凡例はあるのに、他の諸本にはある跋文が付いていないのも未完成であるためと思われる。

『龍谷学覺内典現存目録』の序文には天明三年冬の年記がある。しかし、諸本を見ると天明三年成立の後にも増補が行われていたことが窺え、学林蔵

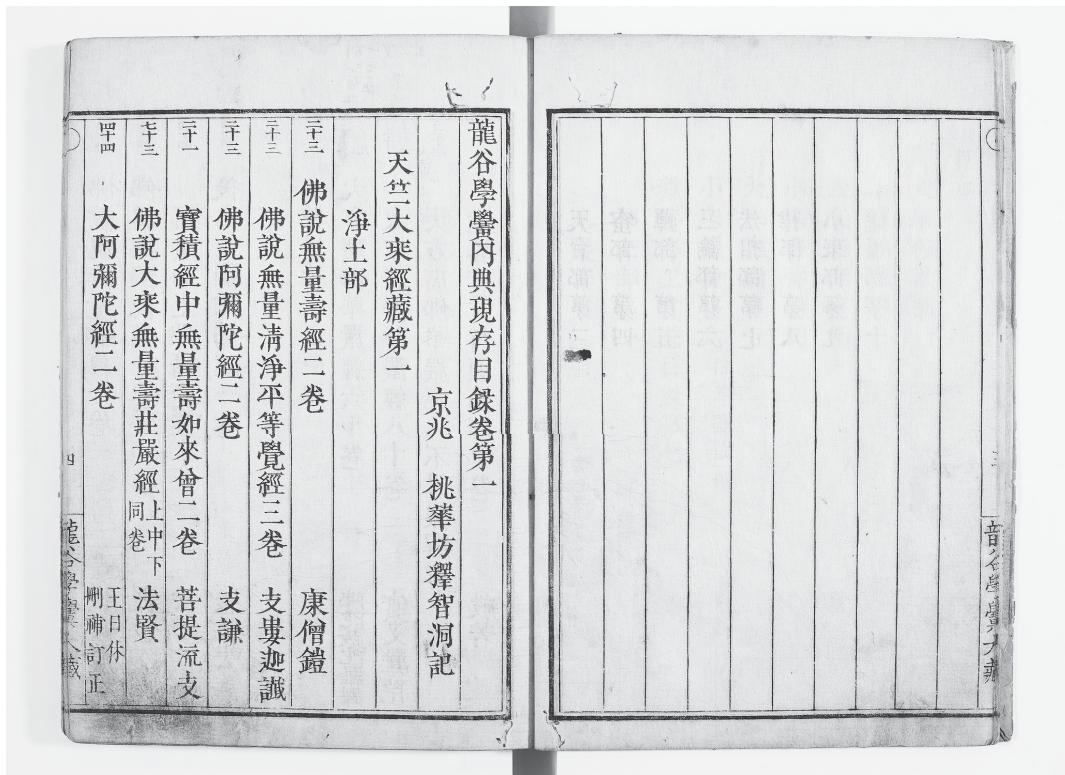


図3 智洞編『龍谷学覺内典現存目錄』五巻の表紙および冒頭（嘉興蔵大蔵經を含む学林蔵書を独特の構成で配置している。）

書本そのものの成立は天明三年より下がると推定される。

『龍谷学龔内典現存目録』を書写した本の中には、この学林所蔵本『龍谷学龔内典現存目録』への道筋を示す本がある。龍谷大学新写字台文庫本と、同志社大学図書館所蔵本の二部である。

まず、龍谷大学大宮図書館、新写字台文庫中の本であるが、大本五冊、一行本となつている（請求記号024.1/198-w/5）（図4）。この本は外題の筆致も見事で、他に比して書写も丁寧である。全体的によく整つた本であるが、第三巻以降の、町版や写本の注記に添えられる函番号を欠いている。凡例の後にある目次と本文の間に北蔵目録の函数を書き添えてもいる。また、随所に朱で書き込みが見られ、所持者が内容をよく確認していたことが伺える。また、学林蔵書本にはない跋文を当該書が備えていることも特徴である。「天明三季冬 門人釈 実道大痴等謹識」と記されており、大痴が智洞の門人であることがわかる。

この本はおそらく原本より少し前に成立していて、かつ智洞手沢本と思われる。理由は以下の通り。まず、当該目録には原本より収載された書目が少ないことである。例えば、『学林万檢雜牘』に拠ると天明三年六月に『大蔵対校録』が入蔵しており、学林蔵書本には入っている。だが当該書には入っていない。

『大蔵対校録』は浄土僧の忍徴が槩蔵を検証し、建仁寺の麗蔵と対校して得た異同をまとめた本であり、現在も「龍谷学龔大蔵書」印を押されたものが大宮図書館に保存されている。その裏見返しには「天明三年卯六月／般若部三巻／寄進當年知事（興辨／玄浄）」（第三冊後見返し）、「天明三年卯夏／宝積部四巻／寄進當年知事（興辨／玄浄）」（第七冊後見返し）と書かれてい

るので、この時期の入蔵であるのは間違いない上、このように書き込みがされるからには智洞が入蔵を望み求めた書であつた可能性は高い。しかし、それが漏れているのである。よつて、この新写字台文庫本は天明三年六月以前

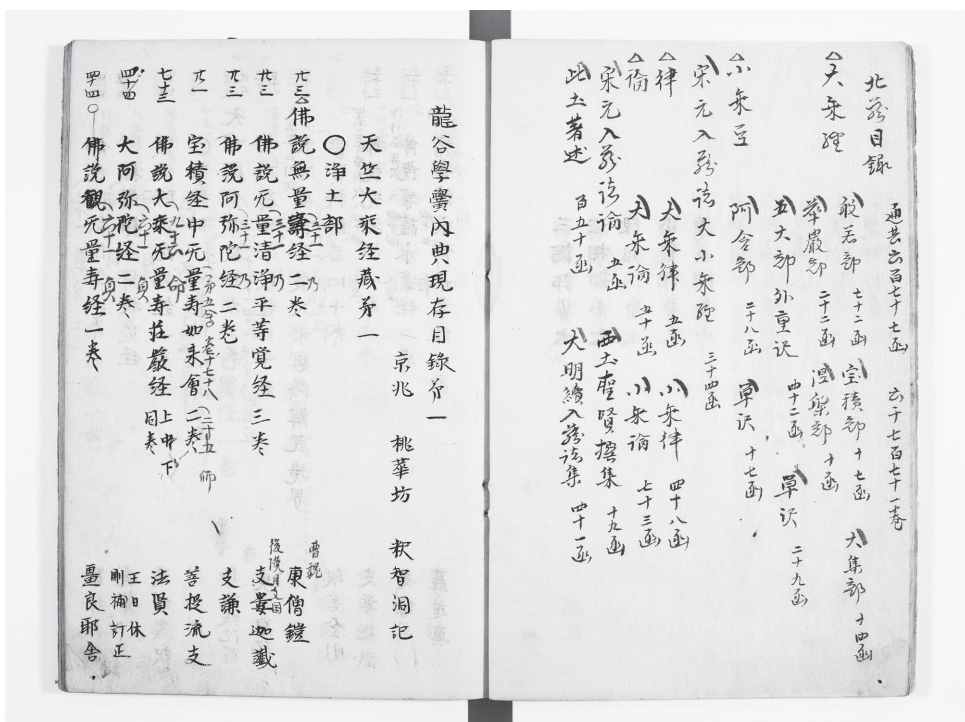


図4 新写字台文庫本『龍谷学龔内典現存目録』冒頭（学林蔵書本のプロトタイプと思われる一本。）

の成立の可能性が高い。

他にも、朱による書き込みで最も多いのが書目に付された数字なのだが、これが智洞手沢本『大明三蔵聖教目録』と関係している。『大明三蔵聖教目録』は嘉興蔵の目録として広く利用された本であるが、龍谷大学大宮図書館には明らかに智洞の目録編纂作業に作られたとわかる一本があり、この本には嘉興蔵に付された千字文ごと、智洞が数字を振っている。たとえば嘉興蔵最初の書目である『大般若経』の最初は「天」で始まるが、この「天」の横に墨で「一」と書き込んでいる。この数字が、当該目録の『大般若経』一巻のところ、朱で書き込まれているのである。おそらく当該目録完成後に、智洞が朱で千字文横の数字をたどりながら確認作業をしていたものと思われる。

以上の点から、当該目録は天明三年十一月より前に成立しており、学林蔵書本から見ればプロトタイプという位置づけになる。現時点で最も古い一本である。

今一部は、同志社大学本（請求記号 028.181R97303-5）である。一、二巻を欠き、三、五巻三冊である。半丁一〇行本。コロナ禍のため閲覧できなかつたため、最終巻である第三巻五巻のみ複写した。従って深誓の序文や智洞の凡例があるかは不明である。だがこの本にも跋文がある。罫紙は使用していないが、字配りなどから学林蔵書本に近い写本と思われる。同志社大学図書館のOPACの書誌情報に拠れば、背書きに「桃仙館蔵」とあるという。桃仙館は不明だが、末寺であろう。筆者が閲覧したのは八部だが、その中で唯一「外典現存目録」が書写されている。さらに、もうひとつ特徴があり、内典部に追録として一四〇〜一四四函三二部を付している。

これら追記分は『学林万檢雜牘』に拠れば天明三年以降に入蔵した本ばかりである。そして、学林蔵書本にはそれが部分的にはあるが、分散してそれぞれふさわしい箇所収録されている。よって、学林蔵書本はこの同志社本より後に作られていると判断できる。つまり、学林蔵書本は天明三年以後に作られている。

外典の整理のために智洞が入林したのが天明三年の七月だった。この時点でおそらくすでに内典の目録の骨子はできあがっていただろう。それが新写字台文庫本であると推定される。そしてその後、何回か増補が行われた。それを窺わせるのが同志社大学本である。その後も修正や増補や削除が続けられ、学林蔵書本となったと考えられる。そして学林蔵書本もまた、修正や削除の痕跡が多いことから未完成と言えよう。

嘉興蔵を含み、独自の配置を持つ

『龍谷学賢内典現存目録』を、平春生氏は学林、現在の龍谷大学における「二百余年講業の基盤となつたもの」の一つに学林における図書収集があり、その収集の図書を分類整理して蔵書目録の編集を行い、初めて学林蔵書全体の貌を明らかにしたものと評価し、今日も、「龍谷大学図書における最初の蔵書目録として忘れてはならない」と位置づけられている。同書の編纂事業が学林蔵書充実に飛躍的に進めたことは筆者も完全に同意する。ただ、それがどのような性質の目録であったかは留意しておく必要がある。

最大の特徴は、嘉興蔵正蔵、続蔵、又続蔵が含まれており、しかも独自の配置で第一巻から第三巻までに縦横にちりばめている点であろう。図3の冒頭部を見ればわかるが、書目の上部にいちいち番号が記載されている。これは元の嘉興蔵の函番号である。「四十四 後出阿弥陀佛解経一卷 後漢失訳」

とあれば、嘉興藏正蔵の四十四函にある『後出阿弥陀佛偈経』を指している。また、三巻以降に配置されている嘉興蔵以外の書目に関して、上部に嘉興蔵を示す「蔵」、続蔵であれば「続」、又続蔵であれば「又続」、町版は「肆」、写本は「写」といった略称とともに函番号が付されている。「肆二十八 法事讚一卷 唐善導」とあれば、町版で、二十八番の函に納められた『法事讚』を示している。

図3の下图を一目見れば分かるが、函番号がバラバラで、元の嘉興蔵の配列を守っていないのである。函だけではない。書目単位で嘉興蔵の配置とは異なっていて、例えば同じ嘉興蔵二百五の函にまとめてある経典であっても、『仏説第一希有大功德経』二巻は主に嘉興蔵の正蔵を掲出する第一巻に納め、他の経典は主に中国や朝鮮半島で著された蔵外の仏書を収める第三巻に入っている。智洞の考えに基づいて嘉興蔵はすべて第一巻から第三巻まで再配置されているのである。また、嘉興蔵以外の蔵書についても、従来の函番号に従わず、やはり再配置している。

このようであるので、『龍谷学贖内典現存目録』は第一巻と第二巻は嘉興蔵だが順番通りではない。また、所々に麗蔵の経典など嘉興蔵にはない経典が入っている。第三巻は、町版と写本、嘉興蔵の正蔵、続蔵、又続蔵が混在し（口絵）、日本の仏書と外典目録である第四巻以降は嘉興蔵はないが学林書庫の函番号が入り乱れた編成となっている。

『大明三蔵聖教目録』の利用

この分類や配置については稿を改めたいが、その選択や配置については智洞自身が一応の凡例を記しているので多少の解説と共に右に掲げる。

龍谷学贖内典現存目録

凡例

一天竺目録、覆異訳甄本支者全依八道人閱蔵知津。其中、先浄土経者吾宗所依也。次、及華嚴法華般若宝積等大部者、順習聖教目録、為令易檢尋、不同用彼五時次第也。又、論蔵及西土撰集之際、彼以其分齊定之今西土菩薩賢聖之作、称論者皆属論称経者、皆属西土撰集。是亦为令易檢尋。

一支那日本目録、积経・积律・积論、皆先举本部於其下列其积必不以宗分之至雜著。則宗分之、亦为令易見耳。其中先浄土者吾宗所基也。次華天密禪三論法相等次第者、従禿鈔指南。

一日本禅宗及日蓮宗諸書、不広索之禅老茶話、日徒漫論无用研義。

一真宗諸書無問、若真若偽、縦令雖末学俗説、全収不捨。此乃本宗所撰為呈研究一助也。

一世称勸化書者、何宗所撰皆捨不列。然至真宗諸祖伝記則一二有取焉。事蹟之類千時五三非无所驗。

一三国諸書、雖一紙半面、皆称一卷、以此為例。

一浄土十要中、有弥陀経要解闡経十二種中、有心経畧解等皆於各経下列之更到雜著出総部名下復列之傍書曰再出。

一如天台止観等、雖為雜著、世称三大部註疏、亦有合解者故、合于玄義文句而列积経中。

天明癸卯冬十二月

京兆 桃華坊积智洞謹撰

この凡例については、すでに平春生氏が論文中で「真宗学匠智洞の達見を示すもの」とした上で紹介されている。¹¹⁾以下に援用しつつ少し紹介する。

まずはじめに印度撰述部の目録において大小乗經典の異訳を確かめ、本末を明らかにするために、八不道人の『閲蔵知津』に拠ったことが述べられている。『閲蔵知津』四十四巻はすでに触れたが、大蔵経閲覽の指針となるべきものであり、かつ新しい分類方法のヒントになる書であった。実際、中国で嘉興蔵が編纂されたときは、編者の失踪で断念されたものの『閲蔵知津』に基づいて新しい分類方法が試みられている。

凡例中に「次、及華嚴法華般若宝積等大部者、順習聖教目録、為令易檢尋不同用彼五時次第也」とあり、このうち「聖教目録」は槩蔵に収録され、また書肆から単独刊行もされた『大明三蔵聖教目録』を指すと考えられる。『大明三蔵聖教目録』は、嘉興蔵の覆刻である槩蔵の目録として日本近世の僧侶の間には膾炙されたものだった。智洞は、大部の經典について『大明三蔵聖教目録』に従って配置したと述べている。また、「不同用彼五時次第也」とあって、「五時」とはおそらく「天台五時教判」と推定され、これに基づいた分類は同じようには用いないとしている。

しかし、学林の蔵書目録を作る際に『大明三蔵聖教目録』に従ったという記述は、実際とは異なる。図を見れば明らかのように、『龍谷学覺大蔵内典現存目録』の配置と嘉興蔵の配置、つまり『大明三蔵聖教目録』のそれとは明らかに異なるからだ。後述するが、もともと嘉興蔵にない書目を入れている場合まである。

先述したが、実際に龍谷大学大宮図書館には学林蔵書(「龍谷学覺大蔵書」印を持つ本)で、智洞手沢本『大明三蔵聖教目録』がある。¹²⁾すでに同書の千字文に書き込まれた数字が新写字台本の朱の書き込みと一致することは述べたが、さらに同書には各經典名の欄外上部に通しの函番号が墨書されている。この番号が、『龍谷学覺大蔵内典現存目録』の上部にある番号と一致する。

智洞は『大明三蔵聖教目録』に従って、嘉興蔵をそのまま『龍谷学覺大蔵内典現存目録』の一卷と二巻に入れたのではなく、『大明三蔵聖教目録』を利用しつつも嘉興蔵をいったんバラバラにして、自身の考えで再配置しているのだ。『大明三蔵聖教目録』を見てはいても、その分類に従ってはいない。

さて、凡例の以下の部分には、浄土教の書を各項目の筆頭に配置していることや、禅宗や日蓮宗の本は多く集めていないこと、真宗に関しては真偽不明のものも研究のために集めていること、勸化本(説教の資料となる本。仏教学でいう談義本)は収録していないことなどが述べられているがここでは省く。

総じて、その分類は、全体を天竺・震旦・日本の三部門に大別している。そして第一に、大小乗の経律論蔵と西土撰集、外論の七科を撰め、第二に震旦部に大小乗の积経律論と雑述・伝記・音義・目録の七科を撰し、雑述の中に浄土と華嚴・天台・密・禅・三論・法相・律と小乗の雑用との十部を分ち、第三日本部も大科七子科十に分つことは震旦部と同じだが、浄土部において浄土真宗と浄土宗を分ち、また小乗积経論の中に外道の論釈を付加している。浄土部を最も重視しており、経論釈の分類では常に浄土部を筆頭に置いているため、浄土教を中心とした目録と言える。また、外典の分類については、清代に成立した四部分類を採っている。

増補や選書の例

智洞はまた高麗版大藏経（麗藏）との異同も気を配っている。麗藏にあつて嘉興藏にないもの、逆に嘉興藏にはあるが麗藏にないものを、「明藏／欠之」、「麗藏／欠之」などと註記し（明藏は嘉興藏のこと）、嘉興藏にないが麗藏にあるもの四五部、嘉興藏にあつて麗藏にないもの三五部を挙げている。智洞には「麗藏明藏互闕目錄」一卷という著書があつたとされ、おそらくこれと関係すると思われる。

さらに、「麗藏及知津貞元録之唯明藏目錄中存此經名無其經」と注記した上で、『番字薬師瑠璃光七仏本願功德経』一卷を掲出している。「番字」とは、蕃字、蛮字とも書き、外国の文字のこと。梵字のことと思われる。麗藏や他の目録になくても、『大明三藏聖教目錄』にあるので、その旨注記して載せているのである。この箇所から智洞は『貞元録』も見ていたとわかる。たとえ学林蔵書にもなく、麗藏や明藏にない經典であつても載せているのである。また、『龍谷学費内典現存目錄』の第一巻と第二巻は主に嘉興藏で構成されているが、第二巻に真諦の著作として「蔵外 金剛仙論五卷」を挙げている。嘉興藏にも麗藏にもない『金剛仙論』を載せているのである。同書は『金剛般若波羅蜜経論』の注釈書だが、一般的には真諦ではなく菩提流支の訳である。合綴された僧朗の目録にも掲出されているが、こちらは菩提流支となつていて、智洞のミスであろう。また五巻とあるが実際は十巻とされていおり、こちらも五巻と五冊を誤つたと思われる。

同書は訳経録になく、古来よりその撰述に疑義がある。『仏書解説大辞典』¹⁴によると、日本では「可なりに広く用ひられたと思はれる本書が、古来の支那の経録に、その名を留めないと云ふ事は甚だ疑問とさるべき点で、余程の

理由がなければならぬと思はれる」とある。疑義があつても日本では広く知られていた經典と言えらるだろう。さらに不審なのは、『金剛般若経』の注釈書類は第三巻に数点挙げられているが、ここに掲出していない。二巻の「天竺大乘論蔵第五」の末尾に配置している。大藏経の一部のように扱っているのだ。『学林万檢雜牘』によれば、同書は安永九年（一七八〇）に入蔵している。おそらく、智洞が必要と思つて取り寄せた本と推測される。

『金七十論』と『勝宗十句義論』

智洞はまた、日本近世独特の仏教学の成果も収載している。一般に、嘉興藏大藏経は内典のみと思われがちだが、二部だけ外典が入っている。『金七十論』と『勝宗十句義論』である。『龍谷学費内典現存目錄』には第二巻末尾に、以下のように納められている。

百卅三	勝宗十句義論一卷	惠目造	玄奘
百卅五	金七十論三卷	真諦	

本来であれば、それぞれ別の場所に配置されていた嘉興藏の書目を一箇所にとまとめている。両書とも外典とわかっているので両書をひとつにして第二巻の最後に配置したのでらう。

外典にも関わらず両書が大藏経中に入っているのは、インド思想を理解するのに必須の書であることによる。しかし、両書の研究は今のところ中国では認められないし、日本の中世、そして近代以降もほとんど行われなかった。ただ日本近世にのみ盛んに行われた。¹⁵

興津香織氏の研究に拠れば、日本において、元禄八年（一六九五）に『金

七十論』が京都書林著屋宗八から単独刊行され、ほぼ同時期に『勝宗十句義論』の注釈書も刊行されている。その後二百年ほどの間、『金七十論』の注釈書が出され続けている。近世を通じて、二六点、一七人の作者が注釈書を書いているのである。日本仏教史上、それ以外の時代には注釈書は存在しない。近世の学僧たちのインド哲学思想に対する総合的な註釈研究が垣間見られる。

『龍谷学叢内典現存目録』には「日本外道釈論部」という両書の注釈書のための専用の項目が立てられ、『金七十論』の注釈書二点、『勝宗十句義論』の注釈書二点が納められている。智洞はこうした日本近世独特のインド哲学研究にも気を配っていた。

後世への影響

『龍谷学叢内典現存目録』の写本は多くはない。筆者が閲覧したものは、先に挙げた同志社大学本と龍谷大学新写字台文庫本を除いて龍谷大学大宮図書館所蔵のものが四部、大谷大学図書館所蔵のものが二部で、他にOPACには寺院が所持しているものが一部あるのが確認できるのみである。大谷大学の二部と龍谷大学の一部は近代以降の書写で、他も、西本願寺の末寺が所持していたものがほとんどと考えられる。近世の写本としては伝存数は多いとは言えず、かつそれらも西本願寺教団内での流布に止まっているので、後世への影響は限定的と思われる。

他に、『龍谷学叢内典現存目録』の影響としては、西本願寺宗主の文庫である写字台文庫の分類に見られる。弘化三年、時の宗主広如は宗主の文庫である写字台文庫の整理を行っている。その際の分類方法として、平春生氏の述べる¹⁶⁾ところを右に掲げる。()内は筆者。

仏典に関するもの、中「大小乗経律論釈」等は中国に於て定められたところに従ひ、我国の各宗の撰述は「専ら我学叢先輩碩学の定められたところの目録」に拠り、更に和書の新古の弁じ難いものは『群書一覽』そのほか和書目録を参照、漢籍は「四庫全書目録」で分類(した)。(中略)

「専ら我学叢先輩碩学の定められたところの目録」に拠つたとあるのは、智洞の『天明目録』を指すのであらう、たゞ「学叢先輩碩学」とあつて明に名まへを挙げてないことは、その目録の識見には服しつゝも、三業惑乱の張本人たる智洞の名を挙げることは憚りがあつたからであらう。

写字台文庫の目録作成の参考とされたが、やはり智洞が罪人となつたことが陰を落としている。ただし、幕末期、東本願寺の学僧丹山順藝がこの目録の構成を採用した自身の蔵書目録を作成している。丹山順藝は極めて広い視野と卓越した学力を持った学僧として知られる。¹⁷⁾『龍谷学叢内典現存目録』に対して何らかの得るところがあつたと考えられ、今後の研究が俟たれる。

日本近世仏教学の成果として

この目録編纂作業の六年後、智洞は能化に就任した。しかし間もなく後三業惑乱という信仰心に大きく関わる大論争が勃発し、学林と在野が対立、争いは門徒を巻き込み全国に波及することとなった。智洞は学林側の主要人物となる。この大論争は収拾がつかず幕府の裁定するところとなつて、結果的に学林側が敗北した。智洞はこの騒動の責任者として流刑を受けたが、文化二年(一八〇五)、刑が執行される前に獄死している。今日、こうした宗教騒乱で名を知られる智洞だが、この時期に学林蔵書に多大な恩恵をもたらした

一面を持っていることは忘れてはならない。平春生氏は、智洞について「宗義安心上のことはともかく、図書館人として智洞の残した足跡は実に大きくその功業はいつまでも讃えられるべきであろう。」¹⁸⁾と大きく評価している。ただし、これまで見てきたように、智洞は一檀林の蔵書の充実と整理を行っただけではない。嘉興蔵を含めた大量の仏書を縦横に配置し、新しい分類大系を示しているのである。

小川剛生氏は目録という書物の性質について、「書物の分類は当時の学問観を反映する。利用し得る書物を整理して分類列挙すること、書目の編纂は学問の隆盛深化と不可分の関係にある。」¹⁹⁾「書目の編纂は、現代でもややもすれば書物を管理する手段として軽視される風潮がある。しかし、仏典や漢籍の書目は書物の単なる一覧表ではない。個別の作品につき経・伝・注・疏の内容を吟味し、歴史的な空間に位置づけた書物であり、学問的研鑽の最高の成果といえることができる。」と述べている。これは『龍谷学叢内典現存目録』にも当てはまるだろう。実際の書庫とは違う書目の並べ方をした大きな目録を智洞は編纂した。つまり、これは智洞の「学問的研鑽の最高の成果」と見做さなければならぬ。

四 新しい大蔵経

玄智の協力

『龍谷学叢内典現存目録』を編纂する上で、学林の部外者でありながら多くの協力をした僧侶がいる。慶証寺玄智（享保十九年（一七三四）～寛政六年（一七九四））である。字を影耀、若瀛といい、号は孝徳坊、曇華室。西本願

寺内町にある慶証寺を嗣いで、本山の法要など儀式を行う御堂衆をつとめた。玄智は学林の学僧というわけではなかったが、聖教の研究において当時最高の学力を持っていた。

『学林万檢雜牘』第二卷、天明二年（一七八二）四月の項を見ると、玄智が『浄土要言』や『十二礼』など、七部の書物を「校刻者」として寄進している。これらの書物は玄智が独自に校訂して開版した真宗の聖教類であった。

また、同じ年に学林は「法然上人十卷伝 写本三冊」を入蔵させ、『龍谷学叢内典現存目録』にも履いているが、やはりこの本は玄智が校訂し作成したものだ。²⁰⁾

また別に、記録にはないが、『龍谷学叢内典現存目録』には玄智が日本ではじめて開版した『自鏡録』二巻が入っている。同書は諸書から因果応報の説話を集めたものだが、玄智は内容に不満を抱き、下巻に補遺を作って出版している。玄智はその学力で、学林蔵書の充実を助けていたのである。

また、麗蔵と嘉興蔵を比べどちらかに欠けている經典については『龍谷学叢内典現存目録』に注記されていたが、これらをまとめた目録と思われるのが先述の「麗蔵明蔵互闕目録」である。智洞著作とされる同書は伝存せず、『龍谷学叢内典現存目録』にも載らない。しかし、玄智が真宗学を学ぶ人の為にと多くの書目を挙げ解題を付している寛政二年（一七九〇）頃刊『真宗教典志』（三巻本とその増補分である一巻本がある）の三巻本第一巻には、解題こそ付していないものの、「麗明互闕目録」として掲出している。玄智は同書を見ていたのだ。

玄智はその著書『考信録』の中で、大蔵経について並々ならぬ興味をもって詳細に記述しているが、それに続いて「大蔵異本ノ事」として、忍徴が著

した『大蔵対校録』について触れ、嘉興蔵にないが麗蔵にある教典について、五九部四九八巻あると述べている。当時であつて玄智は、大蔵経について最も熟知していた学僧の一人であり、麗蔵と嘉興蔵の違いもよく把握し留意していた。

『真宗教典志』

さらに、玄智は『真宗教典志』（一卷本）において、「龍谷学贖内典現存目錄」という項目を設け『龍谷学贖内典現存目錄』について言及している。非常に長い前置きがあるのが特徴である。

まず、日本で開版された大蔵経の第一は天海版だが、これは不便で使えないとした上で、それに代わるものとして鉄眼開版の槩蔵を挙げる。手に入れやすく、読むのに便利だとその利点を述べた後、その欠点を挙げている。^②

然多_二誤脱錯簡_一。且檢_二諸蔵編集_一。至_二支那著述之選_一。則僅取_二天台三大部_一・華嚴章疏_一。及枝末鈔記。或禪徒語錄文集等類。以充_二其數_一。或於_二同本_一。棄_レ本取_レ末。近如_レ取_二集札懺儀_一。而漏_二十二札及往生札讚_一。載_二自鏡錄序_一。而逸_二本錄_一等。最為_二不滿_一。蓋_三唐季五代乱争_一。經典散失之時_一。而結_二集之_一。故不_レ得_二全備_一耳。

槩蔵は誤りが多い。また諸蔵と比べてみると、入蔵している經典に過不足があると指摘する。中国著述は天台の三大部と華嚴の章疏だけをとっている、あるいは枝末的な書籍を採録しているとし、さらには禪の語録などで数をあてていると不満を述べている。

そして、不足している經典名を具体的に挙げている。『集諸経札讚儀』の

うち、『十二札』と『往生札讚』の部分漏らし、『自鏡録』序は載せているけれども、その「本録」を逸しているところなどが最も不満であると述べている。このうち『往生札讚』についてはすでに町版があつたが、残る『十二札』と『自鏡録』については玄智が独自に校訂し開版しているのである。

さらに「本邦旧来不富_二内典_一」として、日本には沢山の仏書があるとし、『浄土章疏』・『大乘義章』・『十地論義記』・『維摩義記』など多くの經典を挙げ、「不_レ遑_二勝數_一」と、数え切れないほどであるという。その上で、槩蔵を開版した鉄眼にそれらを補う気がなく、嘉興蔵をそのまま覆刻したことを惜しんだ上で、玄智は次のような考えを提示している。

顧夫改_二刻別蔵者_一。事非_二容易_一。冀_レ傍_二明蔵_一。別製_二大蔵目錄_一。聖經依_二余蔵等_一。補_二闕本_一。漢典芟_レ雜削_レ末。代以_二本邦現流諸大家疏_一。以_二千字_一為_レ記。全如_二旧式_一。令_レ其請_二蔵経者_一。不_レ必守_二株於明蔵_一。直從_二新目_一。請_二求経疏_一。新編諸本。製_レ帙附_レ号。則僅刻_二若干部_一。而全蔵斯成。

それらを踏まえ別蔵を改刻することは容易ではないから、近くかたわらに嘉興蔵をおいて別に大蔵目錄をつくりたい。經典は他の蔵経によって欠本を補う。中国の經典で雑なところは刈り取り、本邦に流布している大家の疏を代わりに入れる。千字文を記し、まったく旧式（おそらく通し番号の代わりに千字文を付している嘉興蔵や槩蔵）と同じようにする。蔵経をほしいと願う者にたいしては、旧弊の嘉興蔵を決して守らぬように、ただちにこの新しい目錄にしたがつて経疏を求めさせる。新たに諸本を編集し、帙をつくり番号を付せば、わずかに若干の部を開版しただけで、全蔵ができあがるだろうと。

これはすなわち、新しい大蔵経編纂を意味している。玄智は嘉興蔵に不満を持ち、日本に豊富にある仏書で大蔵経に加えれば最高のものができると考えているのである。

玄智は続けて以下のように述べてこの項を終わっている。

不肖嘗抱_二斯志_一尚矣。法務忝劇。未_レ違_レ従_レ事。今学覺目錄之作。亦
有_レ補_二于斯_一者。非_三必為_二一家私書_一也。同志者檢焉。

すなわち、未熟な自分がかつてこの志を懐いたけれども、法務がせわしなく未だ果たせていない。今、この『龍谷学覺内典現存目録』について、これに補うべきものがあれば、それはひとつの家に秘蔵していくべき書ではない。同じ志の者は（公開を）検討してほしいと呼びかけている。

玄智の考えでは、新しい目録さえできれば、多くの本が手に入る日本ではそれを見て本を揃えれば、新しい大蔵経ができるという。『龍谷学覺内典現存目録』は、この新しい大蔵経編纂への道筋にある書なのである。

平春生氏は、この記述を以て智洞が「大蔵経」編纂の意図を有していたとしているが、²²この文章の主語はあくまで玄智である。玄智が新しい大蔵経編纂を夢見ており、玄智にとつて智洞が編纂した目録がこれに最も近いものであったと考えた方が妥当であろう。

その智洞に新しい大蔵経編纂の意志があったかは明確ではないが、しかし嘉興蔵を配置換えし少なくない部分を町版と混在させているのを見れば、嘉興蔵に満足せず、それを超えていこうとしたことは間違いない。両者はいずれもこの後失脚し、²³西本願寺は三業惑乱の混乱の後、教学の在り方も変わ

っていく。彼らの目指したものは失われた。しかし、こうした学僧たちが日本の近世後期にいたことは強調しておきたい。

おわりに

『龍谷学覺内典現存目録』は、日本近世にあつて最も充実した檀林のひとつである西本願寺学林の蔵書目録である。編者智洞は、嘉興蔵を含む膨大な仏書を独自に分類し配置している。嘉興蔵の配置にも満足せず、また日本近世の仏教学を取りこみ、全ての書物を自由に配置しているのだった。書目の上に付された函番号の順序がバラバラであることから明らかだが、これは学林書庫で本を探するための目録ではない。同書は、目録上の分類や系統立てを示すことに力点が置かれているのだ。これは智洞の思想の表明であり、近世仏教学を代表する研究成果のひとつである可能性がある。

新しい大蔵経について、それに至る具体的な方法を示した玄智は、智洞の編纂作業によく協力し、『十二礼』開版など具体的に実行している。そして智洞の『龍谷学覺内典現存目録』を見れば、それはほとんど達成されているようにさえ見える。

『龍谷学覺内典現存目録』編纂の後ほどなくして、玄智も智洞も不遇のまま亡くなった。『龍谷学覺内典現存目録』の後世への影響は限定的となり、また新しい大蔵経の編纂は実現しなかった。しかし、先述したように幕末の学僧丹山順藝が、自身の蔵書を『龍谷学覺内典現存目録』に倣つて配置した蔵書目録を作っている。順藝は建仁寺所蔵の麗蔵と壁蔵の厳密な比較を行った人物として知られるが、稀覯本の探索にも優れ、徹底して諸本を対校し、

原典を目指した学僧でもあった。大きな視野を持った智洞や玄智と問題意識を共有していたはずである。

日本近世後期、玄智や智洞らのような、広い視野を持ち大蔵経編纂まで考える学僧がいたことは忘れてはならない。今後は、智洞の思想の提示であり近世仏教学の成果である可能性のある同目録に関して、その内容をさらに研究すべきと思う。本稿はその第一歩である。

注

- (1) 妻木直良編『真宗全書』七十四卷（藏経書院、一九一六年）に、真宗関係書の箇所のみ翻刻されている。
- (2) 三浦真証『教行信証』伝授の一試論―寂如上人御講義を通して―『真宗学』一四〇号二〇一八年
- (3) 中田篤郎「龍谷大学図書館所蔵 明版（方冊本）大蔵経について―序説―」（小田義久先生還暦記念事業会『小田義久博士還暦記念 東洋史論集』一九九五年）
- (4) 王芳『嘉興蔵』と江戸仏教―鳳潭『扶桑蔵外現存目録』を中心に―（『インド哲学仏教学研究』二十四号、二〇一六年）
- (5) 龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻、四三四頁（龍谷大学、二〇〇〇年）
- (6) 龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』史料編第一巻、第二巻（龍谷大学、一九八七年）。『学林万檢雑牘』は史料編第一巻、『学林万檢』は史料編第一、第二巻、嚴護録は第三巻（一九九〇年）から引用している。
- (7) 平春生『龍谷学叢大蔵内典現存目録』について（天野敬太郎先生古稀記念会編『図書館学とその周辺―天野敬太郎先生古稀記念論文集』天野敬太郎先生古稀記念会、一九七一年）

- (8) 詳しくは注（5）前掲書『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻の三四七―三四九頁を参照されたい。
- (9) 注（7）前掲論文
- (10) 注（5）前掲書、三四七頁
- (11) 注（7）前掲論文
- (12) 龍谷大学大宮図書館所蔵『大明三蔵聖教目録』一冊（請求記号201.1/21-w）
- (13) 井上哲雄編『真宗学匠著述目録』（百華苑、一九七七年）など
- (14) 小野玄妙編『仏書解説大辞典』（改訂版）（大東出版、一九六四年）
- (15) 興津香織「江戸期における『金七十論』研究の背景」と「日本における『金七十論』とその注釈書について」（『印度學佛教學研究』六四号（二）、二〇一六年）
- (16) 平春生「写字台文庫の成立について」（『龍谷大学論集』第三四二号 一九五一年）
- (17) 万波寿子「丹山順藝―論其學問與藏書」二〇二〇佛教文獻與文學國際學術研討會 十一月（発表用會議論文）
- (18) 注（7）前掲論文
- (19) 小川剛生『中世の書物と学問』四七―四九頁（日本史リブレット78 山川出版社、二〇一〇年第二刷）
- (20) 実際に、龍谷大学大宮には玄智の写本『法然上人伝』三冊が学林蔵書として所蔵されている（請求記号296.5/163-w/3）
- (21) 『真宗教典志』は注（1）前掲書『真宗全書』に収載されているものを引用した。
- (22) 注（7）前掲論文
- (23) 玄智が晩年に本山から冷遇された理由は未だ判明していない。